

寺院実態調査報告IV

北海道利尻島寺院調査

久 住 謙 是

(現代宗教研究所嘱託)

一、利尻島の概況

二、日蓮宗寺院の現状

- (1) 離島の児童福祉、幼児教育に生きる——A寺
 - (2) 無住寺を信仰の寺に復興——B寺
 - (3) 漁業不振、構造的不況下の寺院護持——C寺
- 三、利尻島のまとめ

一、利尻島の概況

利尻島は、北海道の北西端宗谷岬から五二キロ海をへだてた西方、東経一四一度一四分、北緯四五度一〇分の北洋上の離島である。

北西一九キロへだてて礼文島があり、南東には利尻水道の彼方に、道内の天塩山脈が望見される。

秀麗な利尻富士（海拔一七一メートル）が、島の象徴で、第四紀の火山活動によって利尻島が生成した。熔岩流や火山成堆積物で島が形成され、海拔三〇〇メートル以上の利尻富士周辺は急峻な山麓となっているが、裾野は、ゆるやかな傾斜が海にのぞみ、ひろく広がっている。

気候は、北海道最北西端に位置しているものの、海洋性であり、対馬暖流の影響で、北海道内陸部のような極端な温度差はない。しかし、十月以降の冬の海は、我々の調査行が強風のため欠航で島にとどめられた体験から、真冬のブリザードを想像しつつ、冬の孤島のきびしさを、かい間見た思いであった。

利尻島は、行政的には二つの町からなっている。島の北東の半分が東利尻町、鴛泊港・鬼脇港が町の中心である。島の西半分が、利尻町で、杵形港・仙法志港が核となっている。その中で、鴛泊がもつとも大きな街を形成して行政・産業・交通・観光の中心となっている。

人口は、両町合わせて一万一八五五人（昭和五五年国勢調査）で、昭和三〇年の二万一二五九人から半分に減少している。他の過疎地と同様、若者が都会からのUターンが僅かながら認められるものの、就職の機会は少なく、若者不在、高齢者比率が高くなっている。

産業は、当然、漁業中心である。就業者の過半数（東利尻町五六%、昭和五五年国勢調査）が、漁業・水産養殖業に従事している。

農業は、火山成の土壌、狭隘地、気候条件などで成立たない。専業農家は、東利尻町にはなく、利尻町に一戸あるのみである。

漁業は、二〇トン未満の小型船で、その中で一トン未満の船外機船が八〇%（利尻町）、〇〜三トン未満の船外機船が八一%（東利尻町）で、総隻数二七〇〇の内、二一七二が船外機を動力とする小舟による漁業である。

漁獲高は、①うに、②かれい、③いか、④昆布、⑤たこ（東利尻町、昭和五八年度）の順位である。小舟をあやつり、

個人的に漁獲する沿岸漁業が中心であることがわかる。

これから漁獲物が塩蔵品・干製品など水産加工される業種に従事する人びとが多い。

二百カイリ時代、外海漁業が中心となり、大型漁船が外海で大量に漁獲してしまうため、沿岸の漁獲量は減る一方で、島の漁業は益々零細化する。一方では、大型船外海漁に対抗するため、過度の設備投資した船があらわれたが、結局、不漁のため、莫大な借財をかかえるなど、漁業の構造的不況に見舞われているといえるであろう。

漁業立地の利尻島がその基幹産業が成り立たない状況のもとで、冬の出稼ぎが恒常化し、若者は島にとどまらず、職業を求めて島を離れていく。

毎年、増加している夏の観光客（三七万九九五五人、東利尻町、昭和五八年）ではあるが、北海の離島、短かい観光期間でしかなく、とても、島の経済を支えるものではない。

利尻島の歴史は、礼文島や北海道沿岸の漁場と同じく、にしん漁をぬきにしては語れない。

にしん漁を追って、内地・日本海沿岸の各地から渡島し、やがて、内地より過酷な生活環境でも定着を進めていったのは、ひとえににしん漁に由来しているといえるであろう。

にしんの豊漁にわきかえった島ではあったが、昭和三〇年頃から、水温の状態が変化したのだろうか、にしんの大群は島に寄らず、幻の魚となってしまった。今でもにしん大漁の到来を夢に見、信じている漁師が大勢いる。にしん景気にわいたその当時の人達が、現在の漁業を支えているのである。いきおい漁業組合員は高齢化している。

にしん漁の途絶は、まさしく島の経済を不況におとし入れてしまった。

現在、さきにふれた沿岸漁獲物が中心に行われている。獲る漁業から、コンブ・アワビ・ウニなど育てて獲る養殖漁業への脱皮が試みられている。

利尻町・東利尻町は、礼文町（島）とともにすぐれた自然景観は国立公園に指定されているが、同時に「辺地」「離

島」「豪雪」に該当する過疎指定地域のきびしい生活環境である。

利尻島には、オホーツク文化から縄文文化の遺跡、貝塚が発見され、先住民族が居住していたことがわかっている。現代に直接に関わる歴史は、一六世紀後半、松前藩領となつてからである。

明治三年（一八七〇）、「開拓使の移住のすすめにより、各県から出稼者が来島しだし、各所に漁場が開けた」。同二年（一八八九）、「全島鯨大漁継続し、この年は鯨群来一週間も去らなかつた」（『利尻町のあゆみ』）と町史にみられるように、明治政府になつてから、開拓の一環として出稼者の来島に始まり、明治二〇年代には、九三八戸を数えるに至つた。豊富なにしん漁による人びとの定住化が見られ、この頃から、仏教各宗派の説教所の設立がみられ、移住者対象の布教が進められた。明治二二年（一八八九）杓形村に曹洞宗、浄土真宗本願寺派の各説教所、同二四年、仙法志村に真宗本願寺派説教所、杓形村に大安寺創立（『利尻町のあゆみ』）などが認められる。

漁業の振興、人びとの定着常住にともない、故郷の先祖伝来の宗教も移入されたのである。

現在、利尻島には、浄土真宗系六、禅宗系四、日蓮宗三、浄土宗二、計一五カ寺である。

浄土真宗がもつとも盛んで、次に禅宗、日蓮宗は三番目である。天台宗・真言宗の寺院はないが、檀家が若干あるということである。

浄土真宗は、いち早く北海道移住と開拓開教を先駆的に進めた歴史的事実、また、利尻島移住団体が、「能登衆」に代表にされるように、日本海北陸、東北沿岸の漁師達であることから、故郷の宗教宗旨を踏襲するとなれば、浄土真宗、次に禅宗であることは肯げよう。

現在、日蓮宗以外の各宗寺院は、すべて後継者が定まっているという。次の項で、本論である日蓮宗寺院三カ寺についてふれてゆくこととするが、三カ寺は、島内二町の内、東利尻町の鴛泊に二カ寺、鬼脇に一カ寺それぞれ所在する。かつて、利尻町杓形に一カ寺存在していたが、昭和三〇年代に合併吸収されて今は無い。

二、日蓮宗寺院の現状

(1) 離島の児童福祉、幼児教育に生きる——A寺（東利尻町鬼脇）

利尻島の南東に位置し、鵜泊から車で三〇分、右回りに三分の一周したところに鬼脇がある。

A寺はその一角にあり、参道を入ると右に本堂、正面奥に町営の保育園があり、一見して、地域活動・社会教育活動に力を入れている様子が窺える。

明治二〇年代の創立と伝え、にしん漁で本土から出稼ぎ人が定住した時期と、創立年代が一致する。

総代の話では、秋田県男鹿半島の出身で、にしんタテ網漁の親方に従って父親の代に鬼脇に来たという。津軽衆とよばれる弘前や、白石出身の人もいるという。檀家は、秋田県や青森県出身などの漁業関係者である。

潮の流れに乗って群来るにしんを、タテ網・サシ網という漁法で獲る春鯨漁で、鬼脇港は活気に溢れ、一年の生計は、これによって支え、にしん漁によって町は成立っていた。

しかし、昭和三〇年、鬼脇に群来したにしんが急に少なくなり、三一年には全くの不漁となり、経済状態が悪化した。その後、毎年春になると、にしんが「来る」「来ない」の議論と、一攫千金の夢を捨てきれないタテ網の漁師もあの中で、現実になしん漁を見限り、他の漁獲に転換するか、土地を離れて新しい職業を求めるか、選択を迫られることとなった。

このため、明治以来、にしん漁に依存してきた住民の人口は、昭和三〇年をピークに、現在は半数に激減した。今、人口増減が横ばいといわれるのは、働ける若者が流出し尽してしまった状態だからだという。

当然、A寺の檀家は一〇六戸から四〇戸に減少してしまった。

現任職は、昭和二八年に福井県三国市から来島した。開教師派遣として三年後には内地へ戻るつもりであった。番

屋のような小屋、裸電球が吊してある寺に入つて、島流しにあつたような暗たんたる気持であつたと、住職はいう。当時、にしん漁に大人たちは忙殺され、こどもたちは、交通事故や水死などの悲しい話を聞くにつけ、こどもが安心して遊べる遊園地や施設のないこと、辺地ゆえの児童福祉、幼児教育の後進性を痛感したという。

さいわい、住職が児童文学に、住職夫人が元教師で幼児教育に、それぞれ専門であるところから、本堂を仮園舎に解放して、ルンビニー保育園を開設した。開設して三年目、幼児教育の重要性が地域の人びとに認識され始めた頃、昭和三〇年、にしん不漁を迎え、住民の極端な生活困窮、保育園の維持困難におち入つたが、日本最北の地に燈した児童福祉施設を守り続け、昭和五九年には創立三〇周年を迎えた。その間、父母の会、地域住民の協力で、独立した園舎を完成、町営へ移管して鬼脇保育所となり、千余名の園児を送り出した。宗谷支庁内で最初の保育園であり、孤島の僻地に高いレベルの幼児教育を開花させ、「島の良寛さん」と慕われた住職夫妻は、保護司・社会教育委員なども兼ね、在島三〇年、困難にして激変した辺地での教化活動は、並大低でなかつたに違いない。「酷い場所に左遷させられた。三年後には島から出る」予定が、生涯をかけることになつたのは、児童福祉・幼児教育の燈を消してはならないという信念が、そうさせたのであろう。「水もきれいです。空気も澄んで都会にはないすばらしいところですよ」と、明るく笑いとばす住職夫人の笑顔が、悔いのなかつた過去と将来を見すえた諦観と自信のようにも感じ取れた。寺は、年間九〇万円の檀家拠出の維持費で営膳され、月回向廻りが主な布施収入である。

現在住んでいる檀家は、他所で働けないために動けずとどまっている人びとである。老齢化が進んでいる。鬼脇地区の漁業権を持つ漁師三〇〇人の平均年齢が五六歳。七〇代・八〇代でも海に船を出して働いている。高校卒業後、地元で留まる若者は、二、三人のみである。A寺には、男三人の子があるが、それぞれ、医学系大学を卒業後、専門職に就いて島を離れており、寺院後継者ではない。夫人の縁戚の小学校一年生の子が継いでくれることを期待している。

寺も檀家も後継者なし、この島に住んでいないというのが現状であり、当然、次の世代にどのようなことになるかということが、当面する問題であろう。

(2) 無住寺を信仰の寺に復興——B寺（東利尻町鷺泊本町）

B寺は、「八中（はっちゅう）のお寺」と通称され、同町字富士岬にある。明治三〇年（二八九七）の創立で、石川県羽咋市本成寺の末寺になっている。能登衆とよばれる団体が定住し、故郷の信仰を伝え創建した。また鳥取県出身の稲葉衆は、菩提寺が無かったため改宗してB寺の檀家となった。

かつては檀家一二〇戸を数えたが、にしん不漁以来減少して、現在六七戸である。この集落は人口一七〇人であるが、三分の一が六〇歳以上で、二人暮らしの老人世帯が多く、中には一人住いの老人も少なくない。

高齢者が増えたため、以前五〇名以上の出稼者があったが、今は一〇名程になっている。

B寺は、利尻富士を仰ぎ、裾野がゆるやかに傾斜して広々と見渡す中に、ポツンと建つ、荒涼とした中のお寺という印象である。

しかし、訪れると、お会式法要のために参道に祖師絵伝を描いた万燈が並び、寺院活動の活発さが窺い知れた。

九月一二日にお会式を早く営み、住職は、現在布教院に入っているということであった。

留守中の住職夫人・檀家総代、案内のA寺住職に伺った。

寺院の年間維持費を定め、檀家の割当としている。護持会とよばないが、内容は同じで、他のA寺・C寺も同じである。同様に毎日の法務は月回向で、葬儀は全くない。

毎月一三日・二三日の題目講、正月・五月・九月の八日の鬼子母神講、四月・九月には七面大明神講が行われる。

寒修行は毎年、島中の各戸を太鼓を打って回り、その布施は町の地域振興策の一助に寄付される。寒中は、平均マイナス一〇度、最高マイナス二〇度になり、降雪は降るのではなく、横なぐりのブリザードで、車が走行不能で遭難す

るといふ話も聞いた。寒修行のきびしさが想像される。

先代上人は、稚内市の寺院と兼務し往復していた。現住職はB寺常住で、夫人と二人で寺を守っている。子息は北海道内の教職について、後継の予定はない。

石川県・鳥取県から移住した檀家は、現在二世・三世の代である。しかし、次の世代がこの島に留まる保証は無いに等しい。B寺の後継者無しと同様、檀家総代の家も同じであり、一般の檀家も、自分たちの代で島は終りだ。一〇年後、お寺の檀家はどれ位残っているだろうかという。

この集落の有力な網元が、島での漁業を見限り、稚内に移住、転出し、そこを母港としてテグリ漁業で成功しており、従業者が稚内に移住して人口減少を招いているのが、この集落の顕著な例である。漁業の大型船化、輸送手段、市場性など経済効率から、稚内への転出拠点化は、当然の帰結であり、利尻島の閉鎖性は、ますます漁業の零細化、ジリ貧、過疎化に追いつちをかけている。

昨年、島の高校卒業生は一五〇余人、その内、一三〇名が島を離れて就職したという。

島内での就職先は、漁業組合・役場・信用金庫・銀行・郵便局・病院だけである。そして漁業に従事する卒業生は今年は二名のみであった。

B寺がかつて、住職常住でなかった頃、ある寺への合併統合の話が持ち上がり、多数の檀家は、将来を考えて合併に賛成したが、五、六戸の檀家が反対して合併不成立に終わったという。

「離島の少数檀家寺では、今後成立ってゆかない。統合すべし」「感傷やその場の感情論を廃し、現在と将来を見ずえた意識の変革が必要だ」「臨教審の国鉄を分割民営に移すことと、現に離島の学校の統廃合の成功例にみるように、寺もそうあるべし、今はその時代が来ていると思う」という意見が出たが、併合の困難を知らされた。

B寺住職は、法務・寺院護持とともに、柔道六段という特技を持ち、青少年育成・社会教育・社会福祉に取り組ん

であり、過疎地の無住寺から常住寺へ、困難な環境のもとで、地域のリーダーシップを発揮していることは注目される場所である。

(3) 漁業不振、構造的不況下の寺院護持——C寺（東利尻町鴛泊本町）

C寺は、鴛泊に所在する。いわば東利尻町というより、利尻町を含めた島全体の中心地、最も大きな街を形成し、人口も多く、官庁の所在地、漁港の中核であり、産業・経済・観光の中心地である。

過疎指定の離島ではあるが、A寺・B寺の深刻さは伝わって来ない。島内で最も恵まれた環境に、C寺はある。

C寺は、明治三〇年（一八九七）に教会を設立、大正一五年に寺号を公称している。開山の中村雪堂上人は、明治三五年、市村座上演の歌舞伎「日持上人遠征記」台本の作者であることが、最近判明して専門家の注目を集めている。現住職は、最近、教職を辞して法務に専念している。

檀家は当然、漁業関係者が多く、昭和初期六〇戸、現在は一〇〇戸である。昭和三〇年代に、妙正寺（利尻町沓形）を合併吸収して二〇戸増加している。島内では檀家数も多く、極端な檀家減少も認められない。しかし、人口は漸減状態にある。B寺の併合失敗ではなく、利尻町沓形所在の寺院の統合に成功している点は注目される。

寺の維持費は檀家割当て賄い、月回向の布施が寺族の生活費に充てられる。毎月八日は鬼子母神講、一三日は題目講が行われる。

後継者は小学校五年生の子をと予定しているという。

鴛泊地区の漁業権保持者は六〇〜六五歳で、三〇年前のにしん全盛時代の夢を今も捨てずに、毎年、にしんが来ることを期待し、網を用意し、経費をかけて待つことをくり返してきた。にしん漁の無い利尻島は経済的に立ち直れないと信じている。

島の経済は漁業主体であることには変りはない。昭和二〇年のにしん不漁以来、ウニとコンブ漁が中心であるが、

漁獲高においては、かつてのにしん漁の比ではない。

鴛泊漁業組合が操業できる区域で、ウニは七月から二カ月間、コンブは四月から六カ月間、組合員六〇〇人が海へ出る。鴛泊でウニ総漁獲量四〇トンにコンブ漁を加えて、六〇〇人で割ると、一人当りの所得が九〇万円前後という。これが漁業権を有する漁師の平均的年間収入である。

中学・高校卒業生対象に漁師を志す人に、町が無償で磯舟を提供して、後継者づくり、人材引止策が効果をあげていないのは、この辺に理由があるという。

また、三〇代・四〇代の人五、六トン級のイカつり漁の船主が誕生している。沖合のイカ漁が内地の大型船によって荒され、ごっそり漁獲されてしまう。それに対抗しながら、沿岸ウニ・コンブ漁からの脱皮をはかる目的であった。しかし、二、三年前からイカも不漁で、借金建造船の返済問題が深刻化しているという。アキアジ（鮭）漁も、設備投資に見合う漁獲高をあげる見通しが立たないかぎり、見合わせているという。

漁師でありながら、海に依存して生活が成立たない。その収入の不足を埋めるために、「出稼ぎ」と「出面取（でめんとり）」が行われ、これが生活手段となっている。

出稼ぎは、漁期が終り、冬が訪れる一〇月半ば、道内や京浜地方を主にした内地へ、土木関係の仕事を中心に働きに出る。歳末、正月に一度戻り、翌年三、四月頃迄働き続ける。夫婦で出る場合もあるが、多数は、男の単身離島である。その間、または年間を通して、塩蔵品・干製品など水産物加工の工場へ、時間契約のアルバイトとして女性達は働きに出る。いわゆるこれを出面取という。

鴛泊は、一年を通して、冬の出面取もできる加工業者が、鬼脇・杵形・仙法志地区より多く出面取の条件がよい。

鴛泊のC寺の檀家は、他地域より恵まれていると見られたが、漁業と出稼ぎと出面取に支えられた生活であることがわかった。離島の過疎地、不安定な経済的背景であることには変りはない。

鴛泊は、利尻島の観光客の玄関口である。島の反対側の利尻町の年間訪問客二〇万人、宿泊三万五〇〇〇〇人に對し、鴛泊を中心とする東利尻町は訪問客三八万人、宿泊二七万人（昭和五八年）と、北辺の離島、短かい夏の観光ブームで来島する観光客は増え続けてはいるが、島の經濟を支え、潤すほどの話は聞かれなかつた。

「産業が無ければだめ、息子は島にとどめられない。經濟的に成り立てば、後継者は残る」と、C寺総代はいう。水産加工も、かならずしも地場産品ではない。加工物に外国産を輸入している。労働力も、老齡化し、働ける世代が無くなると、当然、出面取の人もいなくなる。加工業経営も将来を考えると、加工物が乏しい、労働力を確保できない狀況が予想される。だから、息子の代にできる仕事ではないという。

現在、海の畑構想、稚貝の研究などが進められ、多角的漁業への脱皮、地域振興をめざしているが、現場では、零細な漁業と出稼ぎと出面取の構造に変化はないようである。

一見、恵まれたC寺ではあつたが、護持する檀家の生活不安は深刻であることには變りはなかつた。

三、利尻島のまとめ

A寺住職は、数年間の滞在が、三〇余年の「島流し」の悲哀を味わいつつ、児童福祉・幼児教育を離島に根付かせ開花させた努力は、冬のきびしい自然を克服する以上の夫婦の道念の強さを感じた。B寺住職は、無住寺統廃合の議論まで出た寺院を、檀家教化・社会教化で見事に生き生きとした寺院に復興させている。C寺は、島の中心にあつて比較的恵まれた環境とはいえ、檀家の構造的不況にどのように教化し、寺院を護持してゆくのか、その苦悩が窺えた。指呼の距離にある礼文島と同様、辺地指定・離島指定・豪雪指定の過疎指定の利尻島である。昭和三〇年以来、にしん不漁が、島の經濟を危うくし、その構造的不況が、離島と自然環境のきびしさと相俟つて、就労人口の流出・減少、老人世帯中心の檀家、離島による檀家減少、残る檀家の後継ぎも離島してしまい、帰るべき狀況ではない。また、

住職の家族、こども達も離島の生活である。明治三〇年代から二代・三代と定住してきた人びとは、「一〇年後、この島はどうなるのだろうか」と、孤島に住む不安を持ち続けているようである。やがては経済活動に相応した適性な人口と社会環境に帰納してゆくのであろうが、それへの過程が、檀信徒と寺院へ真冬のブリザードのごとく、その試練のきびしい状況が続くであらう。

その意味では、現在もなお、開拓開教の弘通精神に燃えた住職教師によつて、離島の過疎地布教がからくも支えられているのである。

この現実を、「日蓮一門」の我々が、このままにしてよいかどうか、考えさせられるのである。